第１９４回　番組審議会

１．日　時　　平成２２年7月１３日（火）１２：００～

２．場　所　　メトロポリタン盛岡ＮＥＷ　ＷＩＮＧ　３Ｆ「星雲 東の間」

３．委　員　　委員総数　　１３名
　　出席委員数　　１０名（欠席委員数　３名）

○ 出席委員（敬称略）

中村　慶久（委員長）
三浦　宏（副委員長）
―以下５０音順―
斎藤　雅博
東海林　千秋
菅原　正二
中川　真
中原　祥皓
村上　幸子
八木橋　伸之
吉田　浩次

○ 会社側出席者（７名）

佐藤　滋樹（代表取締役社長）
小原　忍　（専務取締役）
藤澤　利憲（常務取締役）
前田　秀男（取締役編成技術局長）
藤原　銀司（取締役営業局長）
一戸　俊行（報道局長）
坂口　奈央（報道局報道部員）

○ 事務局　　村田　重昭

４．議　題　　FNS ドキュメンタリー大賞

凸凹な僕たちと学校の母ちゃん　～特別支援学校の１年～

平成２２年５月２２日(土)　１６：３０～１７：２５放送

５．議　事　概　要

今回は５月２２日に放送した「FNS ドキュメンタリー大賞 凸凹な僕たちと学校の母ちゃん～特別支援学校の１年～」について審議しました。出席した委員からは「重いテーマにもかかわらす生徒たちに正面から向き合った感動的な番組だった」、「渡辺えりさんのナレーションがとても良かった」、「発達障害について知らない人がまだまだ多いので、もっとたくさんの人に見てほしい」など番組を評価する意見がありました。

また一方で「就職活動だけではなく寄宿舎や授業の様子をもう少し紹介してほしかった」、「ただ“頑張って”というだけではなく解決策や打開策があれば良かった」、「行政や社会への問題提起がほしかった」などの意見がありました。

６．議事

〇事務局

それでは、ただいまより第１９４回番組審議会を開催致します。

先月退任されました椎井副委員長の後任として、東北電力株式会社 執行役員岩手支店長の三浦 宏 様が、本日より当番組審議会の委員として出席されております。慣例に従いまして三浦委員に副委員長の職をお願いしたいと思います。

委員の皆様よろしいでしょうか？（異議なしの声）

はい、ありがとうございます。三浦副委員長、それではよろしくお願いいたします。三浦副委員長の略歴は、皆様のお手元に配布してございますので、そちらをご覧ください。

番組審議会に出席する弊社役員にも変更がありましたので、ご報告申し上げます。

さる６月２４日の株主総会におきまして、こちらにおります藤原銀司が新たに取締役として選任され、本日より番組審議会に出席しております。皆様、よろしくお願い致します。

本日ご欠席の委員は、斉藤純委員、久慈委員・役重委員の３人です。

今回の議題は、で５月２２日に放送した「FNS ドキュメンタリー大賞 凸凹な僕たちと学校の母ちゃん　～特別支援学校の１年～」です。本日は、放送時の報道局長でプロデューサー

をつとめました一戸とディレクターの坂口報道部員が出席しております。
　それでは、中村委員長よろしくお願いいたします。

○中村委員長
　さっそく議事に入ります。一戸さんと坂口さんから今回の番組の背景等についてご感想、ご説明をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

○一戸局長
　ＦＮＳのドキュメンタリー大賞は、フジ系列各局の番組制作力の向上、そして、ノウハウの蓄積を図るということを目的にしています。今回で19回目になります。各局が１年間力を入れて制作した番組が放送されます。めんこいテレビでは５月に放送されましたが、全国では、このあと順次放送されていくことになります。大賞及び各賞は来年の１月に発表される予定です。今回の番組は支援学校を題材に、約１年半に渡って追いかけたドキュメンタリーです。今まで特別支援学校や発達障害といったテーマを取り上げたものは数が少なかったと思います。そういった意味でも、今回は取材が非常に難しかったのですが、学校と保護者の皆さんの大きな協力があって番組を作ることができました。通常ですと番組全編にモザイクが入るような状況も考えられるのですが、今回は殆どそういったこともなく放送できました。
　発達障害の定義や特別支援制度の問題など、非常に難しい部分がたくさんありました。そこは私もディレクターの坂口も悩みながら作りましたが、最終的には寄宿舎の母ちゃんである高橋先生の視点を、ひとつの軸として番組を構成しています。
　坂口は、番組の制作に関しては、春高バレーのコーチングキャラバンの番組を一度担当したことがあります。今回のドキュメンタリーの制作にあたって、非常に難しいテーマを取り上げ、たくさん悩みながら挑戦したのではないかと思っています。

○坂口ディレクター
　今回取材を始めたきっかけは、この特別支援学校で講演をしたことでした。特別支援学校というのは元の養護学校ということで、正直なところ、生徒たちはどこまで話しを理解できるのかという不安がありました。先生たちにお聞きしたところ「普通に話して下さい、全てわかりますから。」という答えでした。不安なまま講演にのぞみましたが、みんな一見、どこに障害があるんだろうという疑問がありました。ダウン症などの知的障害がはっきりしている

生徒もいます。およそ半分は話しをしてみても全く受け答えに問題がありません。「何でなんだろう、どうしてなんだろう。」という疑問からこの取材が始まりました。

今回の番組の中で何より心がけたのは、生徒たちの表情です。生徒の中には親御さんの都合などで撮影してはいけないという生徒たちがいます。でも、生徒たち本人に聞くと自分は映りたい。自分の堂々とした表情を見てほしいと訴える子が少なくありませんでした。そんな彼らの素の表情だったり、素の声を撮影したいという思いがありました。寄宿舎に週１回、夜行きまして、できるだけ交流をもって、いろんな話を聞いたり、悩みを聞いたりすることを大切にしてきました。その中で作りあげた番組です。私の中では１年半、本当に母親がお腹の中で子供を育てるようにゆっくり、じっくり温めて生み出した番組です。忌憚のないご意見をお聞かせ下さい。

○中村委員長

それでは委員の皆様からご意見、ご感想を伺っていきたいと思います。

中川委員からお願いします。

○中川委員

坂口さんとは県庁の記者クラブで産經新聞と席を並べています。いつの間にこんな素晴しい番組を作っていたのかという驚きがありました。週１回通っていたということでしたが、取材の積み重ねによっていい結果を出されたと、羨ましく思っています。ドキュメンタリーとしては、非常に素晴しい出来だったと思います。

学校の中にはいろいろと取り上げる素材はあったと思います。伸也君と夏美さん２人に絞ってあまりブレなかったこと。発達障害というのはどういうものなのかという説明がしっかり出来ていました。お涙ちょうだい的なものに走らないで、しっかり事実を積み重ねて作られていましたが、それでも最後は感動して泣いてしまいました。

特に番組の中で僕が感動したのは高橋先生です。彼女の「ゆっくりだけどちゃんと歩いている。あなたは亀なんだ。」という言葉はなかなか良い言葉だと思いました。出てくる学校の人たち、親たち、仲間たちが真正面から向き合って生きている。もちろん彼らに苦労は多いわけですけれど、普通の学校や会社で過ごしている我々よりも濃密な時間を過ごしているのだな、と思いました。

もう一つは「力」という言葉が非常に印象に残りました。校長先生が「みんなの目には力

がある」と言われていました。吉浜ラーメンの方も「１年後はちゃんと仕事ができる力がある」と先生に言っておられました。採用はできなかったけれど、先生を通じて本人に伝えて本人も自信をもつことが出来ました。メッセージが非常によく伝わってきたと思います。

普段の生臭い仕事を離れて、本当に感動することができました。いい番組を見させてもらいました。

○中村委員長

菅原委員、お願いします。

○菅原委員

私は子どもの頃から凸凹を自覚していました。この番組を見ていて、非常に親近感を抱きました。凸凹をなぜ取らなくてはいけないのか？　つまり、アイシュタインも凸凹だったと番組の中でも言っていました。山下清もそうでした。あらゆるアーテイストは凸凹です。天才に算数をやれといっても無理です。つまりこの番組は非常に問題提起をしているわけであって、凸凹の何が悪いのでしょうか。全部平均的にできる人を基準に、そこから凸だ凹だと言っているけれども、実のところ、何の不思議もないと思います。昔はこういう人は、それほど問題にされることなく、たくさん世の中にいたと思います。

いろんな職人さんや芸人さん、僕の知っているジャズメンは殆ど凸凹ですよ。ほとんど発達障害の人がジャズをやっています。だけども素晴しいものを人に与えているわけです。

ですから、第一に平均的に何でもできなくてはいけないという考え方自体に問題がある。もっと凸凹な人たちが自分の才能を発揮して生きていけるような方法を考えてもいいと思います。自分で早く気がつくといい。僕なんかも気がつきました。これはジャズ喫茶でもやるしかないなと、そうすると好きなことは人の１００倍ぐらい頑張る事ができる。でも、毎年３月１５日の確定申告の時期になると、私は全くただの人以下になって電卓も押せないような状態です。毎年、難儀しています。私も家内と一緒に見ましたが、「昔からあなた、これよ。」と言われましたので、はっきり認めました。

ですから凸凹でもいいから、自分の得意技見つけて、そこで押しまくっていけば道は拓ける。そういう環境を作る。区別していつも平均的な基準で判断するという考え方を少し変えてみてもいいんじゃないか。例えば数学の天才でも普通のことが全然駄目だったりしている。アインシュタインもそうだったとちょっと出ていたけど、あれはもう少し詳しく言ってほし

かった。私の部屋にはアイシュタインの写真をベタベタ貼ってあるります、何か気が合う人だなと思って（笑）あの方は愛嬌がありますよね。得てして天才は全部を満たすことはなかなか難しいと思います。何か欠落していた方がいい物を作っている。それが皆回りまわって社会が恩恵をこうむって、皆で飛行機に乗ったり新幹線に乗る事ができる。たいがい一部の気違いか、おたくのような人が最初は考えている。そういうことを忘れて、そいう人たちを笑っているのが間違いのもとです

僕は、全然、同情的な見方をしていません。伸也君は普通の人よりも立派なコメントを述べています。俺、あんな立派なことはしゃべれない。あの子はとてもいい子で、何か自分に合った事を見つけた時に、とても素晴しい事をやると思います。

それとは別にお母さんとしての高橋先生には泣かされました。私はちょっと変な見方をしていて、「俺もそうだよな」というような感じで見ました。お茶の間であれを上から目線で笑って見た人たちには「あなた、少し油断がありますよ。」とちょっと言いたかった。特別学校へ行ったり、病院に入ったりしなくても凸凹な人たちがいっぱいいますが、私が知っている人は皆凄いですよ。

この番組は実は表に出たお涙ちょうだいとは別に、底辺に問題提起をしていると私は見ました。審査員の方がどう見るかは知ったことではありません。それはお任せします。

○中村委員長

八木橋委員、お願いします。

○八木橋委員

重いテーマなのですが、まずテンポが良く、語りがいい。渡辺えりさんは、普段はひょうきんな役をやっていますが、じっくりとしたいい語りでした。飽きないで見る事ができたのが非常に良かった。前の二戸の萬代舘の番組もものすごく面白かったけど、ちょっと冗長なところがありました。ドキュメンタリーは毎回毎回進歩しているような感じがします。だんだん間の取り方やテンポの取り方が進歩しているような感じがして、すごく良かったと思います。

間の取り方が面白いのは、渡辺えりさんが質問を心の声のようにして出して、その質問部分をカットして伸也君が直接答えを言うという手法がけっこう使われていました。あれは見ている人に冗長さを感じさせない、非常にいい感じがします。テンポが良かったこと、主人

公の設定を２人に絞った事が良かった。あまりバラけないで、飽きないで見ることができました。

番組では企業名を直接出していました。縫製工場は夏美さんを採用したから良かったですが、吉浜ラーメンは結局辞退したわけです。見方によっては、あいつはテレビでいいことを言っておきながら、最後は辞退したではないか、というような悪いイメージが付くかと思っていたら、堂々と名前を出して逃げずにやっていました。あれはディレクターが交渉したのでしょうけれど、あのような紹介の仕方はなかなか良かったと思います。

事実にしっかり向き合って、伸也君の暴れた所も逃げず映していて良かった。好感というものではないけれども、事実と向き合っている事がしっかり伝わってきて良かったと思います。

最近、某週刊誌で「大人のあなたも発達障害」という記事を見て、私もびっくりしました。そういう意味では最近のテーマとして、非常に良かったのではないかと思います。

個別の話しになりますが、インタビューを聞いていると発達障害の支援制度が出来てからなのでしょうが、むしろ一般高校の先生の方が、こういう子供達を普通の高校に入れた時に抵抗感があるようです。あれを素直に番組のインタビューで撮っていたのは大きい。周りの障害がいかに大きいか分かります。あれは非常に良かったですね。

ちょっと気になったのは、伸也君への中１でのいじめを、もうワンシーン手前で紹介してくれないと、休みにも家に帰らずという部分との脈略がなくて、後半を見て「そうだったのか」と分かるのです。どちらがいいかは？一概には言えないのでしょうが、私の感覚ではもう少し１分か２分手前に入れておいてもらうと分かりやすかった。

感動したのは門馬校長の言葉です。「養育手帳をもつと障害を自認することになるので、なるべく持たせないですませようとしている。逆に障害のない人が手帳をもらって就職を有利にすることだけは避けたい。」あれは感動しました。やっぱり本当に教育者というのは、あのような矜持があるのだと思いました。

もう一つは廊下で伸也君が後輩と話をしている時に、自分が先生から教わった事と似たような事を言っていました。最初は学ぶ、真似る、それを人に話すことで自分がまた学習していく。そうした成長の過程を素直に見る事ができて非常に良かったと思います。

いずれにしても重いテーマをこの時間でよくまとめていて、私としては非常にいい番組だったという気がしています。

○中村委員長

斎藤委員、お願いします。

○斎藤雅博委員

非常に重いテーマを扱った番組だなと思って見ました。本当に外見は普通の人と全く変わらない発達障害の生徒たちの苦悩と、それを支える学校と母ちゃんとしての高橋先生。周囲の人たちの思いが本当に伝わってくる番組だったと思います。恥ずかしいことに発達障害についての知識があまりありませんでしたので、健常者と知的障害者の狭間と言っていましたが、そういった方々の葛藤、苦しみなどを、番組を通じて知る事ができました。

先ほど、菅原委員がおっしゃっていましたが、昔はこういう人が同じクラスにもいっぱいいたような気がします。昔は差別ではなく、個性の違いとして受け入れてやってきたような気がします。それがなぜ現代社会でもできないかという思いも一方であります。問題提起としてそういうところもテーマとして表現されているのかなと感じました。

伸也君と夏美さんの本当の素の顔、声を届けたいということでしたが、非常によく表現されていました。１年半におよぶ取材ということでしたが、最初と最後の比較で、２人がずいぶん成長したのが分かりました。長期間のドキュメンタリーの効果だと思います。

学校の父ちゃんこと校長先生の言葉は非常に良かったです。彼の教育感が非常によく出ていたと思いました。最終的に感動したのは母ちゃんである高橋先生の愛情です。自分の子ども以上という話もありましたが、愛情をもって生徒に接していることがよく伝わってきました。

どちらかというと番組では、就職活動が中心になっていたような気がしましたが、寄宿舎での生活や学校での授業の様子を、もう少し映像で見せても良かったように思いました。また、発達障害をよく分からない者にとって、具体的なところで分からないところがありましたので、なかなか他の生徒の顔を出す事ができないという制約があることも理解できますが、発達障害について、できたらもう少し紹介してもらえれば良かったと思います。

学校ということでいろいろな事を教えているでしょうけれど、この番組を通じてもっと深い教育の原点のようなものを感じさせてもらいました。単なる知識ということではなく、いろいろな関わりの中で子供達がどんどん成長していくのがよく表現されていました。教育的にもこういった事をよく考えるべきだという思いで見ていました。カメラからも温かい気持ちが伝わってくる非常によい番組だったと思います。

○中村委員長

中原委員、お願いします。

○中原委員

菅原委員のお話もありましたが、私は数学、算数に対する発達障害なんです。ＩＴについても発達障害。これは私は捨てましたから何とも思いませんが、ＩＴを強制されたら、えらい歩みをしただろうと思います。番組自体については着眼もいいですし発想もいいです。坂口ディレクターが、ご自分で疑問をもったことがスタートだったと、最初に言っておられましたが、それがこの番組を厚みのあるものにしていました。非常に細かい点まで見ていらっしゃる。画面やナレーションにも表れていました。

私もこの番組がいろんな問題提起をしているし、いろいろなメッセージを出してくれていると思いました。私も改めて発達障害という問題について考えさせられました。以前は養護学校と言いましたが、岩手大学でも特別支援学校というのがありました。私も何度かその学校に行きましたが、それが自分たちの仕事の先だと思うと何とも思わなかった。「頑張ってくださいよ」ということで、別の視点で問題点を見ていました。この番組を見て、身近にいるとかえって問題を見過ごしてしまうことにあらためて気付かされました。非常にいい番組だったと思います。

番組では、問題提起があって、だんだんと発達障害を取り巻く状況が分かってきました。そこでちょっと気がかりだったのは、ならば解決策、打開策は何なのか？ということです。先生の言葉や、学校の母ちゃんの言葉にその一部が出てきていました。たぶん表現しにくいことだとは思いますが、はたしてそれだけでいいのか、という思いがあります。結果的に「頑張りなさいよ」という終わり方もちょっと気になりました。

たまたま先日、県の支援検討委員会がメディアに出ていましたが、このような社会的な問題に対して、教育的、行政的にどのような支援があるかのかという、番組としての問題提起はどうなのか？番組に出演した子供達に問題提起させるわけには当然いかないので、番組を見た人たちに対して、さて社会的、行政的にどのような支援を組織的にできるのか、問題提起をして欲しいです。たぶん、教育委員会でやっている検討委員会などでそういった問題に取り組んできたはずです。この問題について取材が１年半に渡ったそうですが、こうした組織に対して、番組として「あなた達はそうした委員会や協議会を作って論議をしているけれど

も、現実にこういう問題があるから、こういうのはどう思うか。」という問題をぶつけて彼らの答えを引き出す。その結果として「社会的には遅れている、まだまだ後手ですよ。」という問題提起もあったのではないかという気がしました。

番組そのものは確かに見ていて目を離せない１時間のドキュメンタリーで、非常にいいんですけど、さて、その１年半の取材が終わり、視聴者が番組を見て、その後の１年で子供たちがどのように変わるのかという、もうひとつの気がかりも出てきます。この番組は問題提起もしてくれて素晴らしい番組なのですが、さて、どのようにフォローしたらいいかということになると、個々人、保護者、学校はどうしたらいいのか。卒業をしても学校が応援するといっても、目の前に教えなければならない子供たちがいると、あまり期待できない。それではどのようなフォローが出来るのか？　もう少し番組の視聴者に安心感というか、いつも気にかけているような、視点を当てさせるような問題提起をして、解決策や指針を見出してほしいと思います。確かに、番組で先生は「ゆっくり歩きなさい」というけれども、目的地までに３年かかるのか、永遠に達することが出来ないのか、いろんな問題が頭に入ってきました。そこでどんな支援ができるのかということが、もうひとつほしかった。行政や協議会などにぶつけてほしかったと思います。もちろん、もろに番組にそういったことを入れてはまずいわけですが。

この番組は現実の問題としていろいろと提起してくれたので、見応えがありました。番組自体からは、私は問題の持つ重さと、もっと社会の人たちは彼らに目を向けてやるべき問題がまだまだ残っているという不安と、両方感じました。斎藤委員がおっしゃっていたように、当時もこうした問題はありました。しかし昔と違って今はそうではないという視点で、支援してあげる必要があるということも、この番組から伝わってきました。

スタート時点から、坂口ディレクター、一戸プロデューサーも含めて疑問に思ったところから入ったということで、私も感銘を受けるような番組を成り立たせたのではないか思います。私はこの努力に拍手をしたいと思います。

○中村委員長

村上委員、お願いします

○村上委員

真っ向勝負の番組作りだったというのがまず見終わった時の感想でした。なかなか骨太な

テーマを真っ向から見据えて感情に流され過ぎず、でも、温かい視線をずっと絶やさず、非常にいい番組を作られたと思います。

「普通に見えるのに、どこが障害？」という疑問からスタートしたことを、最後まで貫いていったことがよく感じられました。「能力のバランスがちょっと違うだけ」とか、「発達障害というのは健常者と障害者の狭間です」とかいう説明が何度も繰り返し出てきます。取材を重ねて、発達障害のとらえ方をしっかりはっきりさせ、最終的に番組を作る時に、そういった言葉に置き換えていったことは、坂口ディレクターの見る目が最後まで揺らがなかったことだと思います。

取材者、カメラマン、スタッフ、プロデューサーのいろいろな人の思いが一つにまとまって１年半という大変長い取材をされた結果、素材もたくさんになって編集も大変だったと思いますが、みんなで悩みながら作った作品なのであろうことが、番組を通じてヒシヒシと伝わってきます。これがテレビの力なんだな、と思いました。

感情が高ぶった真也君の心のバランスの揺れを表現するときに、母ちゃんである高橋先生が何度も言っていた、「今、目が三角になっている」という言葉、それら一言一言の編集はとても大変だったのではないかと思いますが、とても生きていたと思います。健常者と心のバランスが違うということを説明するために、渡辺えりさんのナレーションでその説明が補足されていました。その原稿を校正したのも坂口ディレクターだと思いますが、例えば「一度壊れた心のバランスを取り戻すのは大変」とか、「こだわりが強い」、「自分のルールに固執して、ＣＤの入れ方にも時間がかかってしまう」というのは本当に的確にとらえているナレーションだったりシーンだと思いました。

私の身近な知り合いにも発達障害の子をもつ人が２人います。ひとりはアメリカ在住の方で、あちらでは発達障害に対して手厚い、いろいろな保護とか制度があります。ひとりにつき先生が２人位付いて普通の学校でやっているそうです。もうひとりは四国の愛媛に住んでいます。お子さんは中学生になりますが、全然情報がなくて全くわからないそうです。県内にも発達障害の子どもがいるはずなのに、教育委員会に行っても行政に行っても、支援の組織などが全くわからない。母は強いものですから、何とかしようとして資料を集めて、そういう仕組みを少しずつ作り始めたようです。そういう現状があるということを思い出しながら見ると、また違う感慨がわいてきた番組でした。そういった子供をもつ親御さんは、たくさんいると思います。そういうお母さんたち、お家の人たちにとっても非常に勇気と情報を与えてくれる番組だったと思います。

この番組は全国放送になりますよね、全国のお父さん、お母さん、家族の方がどれだけ癒され、救われるかと思うと全国放送がすごく楽しみです。

○中村委員長

では、東海林委員お願いします。

○東海林委員

発達障害については、私の仲のいいお母さん友達で悩んでいる人がいます。３人お子さんがいるのですが、１番上の子の躾が悪いと、お姑さんからすごく言われて、自分が嫁の立場として辛いという相談を受けていました。もしかしたら発達障害なのかなと思い、それは障害なのであなたの躾のせいではない、というアドバイスをしたことがありました。先ほどお話が出ていましたが、その友達は岩手大学の中のそうした支援をしてくれるところで、学生さんたちの支援を受けながら、一緒に遊んでもらったり、薬をもらったり、病院に通ったりして、今は高校生になって落ち着いています。

そのようなことがあったので、普段の日常生活の中で、もしかしたらこの子がそういう障害を持っているのかなというのは、私は分かります。この子は躾の悪い子ではなく障害なのかも、と思うのですが、発達障害だということを、私も医療関係者ではないので軽々しく口に出すことはできません。お母様も自分の子どもが精神的な障害だということを認めたくありません。小学校の授業参観日に行って見ると、誰にも言いませんが、残念ながらどの学年にもひとりぐらいは「この子は多動性症候群」なのではという子がいます。昔はそういう子がいても、その子の特徴としてとらえ、ガキ大将だったりした子と仲良く付き合っていたのでしょう。今はそれがいじめにつながってしまったり、仲間はずれにされたりとなっているところが問題なのだと思います。

坂口ディレクターが最初におっしゃった、昔だったらモザイクをテレビの画面にかけなければならなかったのだろうけれども、というところが重要なところだと私は思います。アメリカだったら支援のシステムがきちんと整っているらしいのですが、日本というか岩手ではそうした体制がないのが現状です。そういう現状を見ていて私なりに思うことは、お母さんたちがもっとネットワークを作っていければいいということです。

この番組はすごくいいテーマで、何か救いを求める気持ちもあってこの番組を拝見しました。最終的には良かったという部分もありながら、番組を見終わったあと、消化不良の部分

もありました。それは伸也君と高橋先生がすごく良い心の交流をしているので、そこの部分はすごく良かったです。ただ何かの打開策というか、何の解決にもまだなっていないのです。打開策はないけれども、ドキュメンタリー番組として問題提起ができるのであれば、お母さんたちのネットワークが今こそ必要なところに来ているとか、躾が悪くて悩んでいるのではなく、障害と認めたくないかもしれないけれども、もう少し勇気を出して、お母さんが自分の子どもを思いっきり受け止めることとか、そういったことを取り上げて欲しいのです。そうすれば、子供達にも、他の世の中の人たちにとっても、何か打開策につながるのではないでしょうか。そうした問題提起ができるのがドキュメンタリー番組なのではないのかなと思いました。

専門学校で教員をしていて、10年位前はいなかったのですが、今はそういう子が学生にいます。昔もいたのでしょうけれど、今はお母さんが、自分の子が発達障害だということを認めません。何の治療もカウンセリングもないまま、就職もできずに専門学校に入ってしまうというのが現実です。だからこそ今回はドキュメンタリー番組のテーマとして、すごくいいテーマを坂口ディレクターが見つけてくれたと感謝しています。

できれば、もう少し違った形で打開策につなげられるような、番組を通していろいろなお母さんたちに勇気を与えられるような、プラスの問題提起になるようなドキュメンタリー番組を、今後期待しています。

〇中村委員長

吉田委員、お願いします。

〇吉田委員

大変、非常に内容の濃い番組だったなと思います。批評するのに事欠かないほどの内容の濃さでした。私は何遍も見まして、見るたびに感動の度合いが深まったという感じを受けました。

発達障害や知的障害で悩み苦しんでいる人たちが、世の中にはたくさんいるんだということと、県立峰南高等学校という存在も知りませんでした。今まで600人におよぶ人たちが学校を巣立って社会に出られたことも知りませんでした。自分自身の世間知らずに恥じをかいたようなそんな印象を受けました。

この番組の最も良かった点は、弱者に対する社会のバックアップというのがいかに大事で

あるかということを投げかけたことです。ドキュメンタリーの良さというのは、事実をありのままに伝えることにあります。それが本当にずばり、そのことが表現されていたことが感動的に伝わったのだと思います。

非常に印象的な場面は、発達障害特有の感情のコントロールができなくなった生徒の様子を、そのまま映していたことです。一般の人で、発達障害がどの程度のものか分かっていない方が、たくさんいると思います。番組を見て「こんなにも変わるのか」ということを知ることが出来ました。

瞬間瞬間を捉えるのがドキュメンタリーの良さだと思うのですが、１年以上に亘って、子供達の様子を追い続けたなかで、よくぞあのような衝撃的な瞬間を撮影できたものだと思いました。先ほど寄宿舎に１週間に１回通っていたという話しでしたが、たまたまあのような暴力的なシーンが撮れたのではないですか？

〇坂口ディレクター

取材で通っていますと、「そろそろだな」と予兆が分かるようになってきますので、タイミングを逃さないようにしました。

〇吉田委員

なるほど、そうことですか。追いかけている中で、よくぞいい場面を捉えたと感動しました。

私自身、涙した部分は、卒業式の場面や寄宿舎を最後にするあたりの感動的な場面です。高橋先生が伸也君に対して「学校に来たときは、服も着れない、制服も着れない状態だった。先生は皮ジャンでもいいから着なさい、と言ったよね。先生だって辛かったんだよ。」と言った言葉に感動しました。先生に対するお礼の手紙とか、あのような本当に心温まる場面が非常に感動的で、先生冥利に尽きるのだろうなと思いました。自分が一生懸命育てた子供が、ここまで成長したのかという思い、その子を送り出す気持ちが、番組の中に滲み出ていたのが非常に良かったと思います。

昔の私の小学校・中学校時代には、こうした人たちが身近にいました。その痛みや辛さをしょっちゅう見ていましたので、はたして今のように完全に分けて教育するのがいいものなのか？一方、親からしますと不安なために、そうした学校に入れて指導したい、教育をしたいという願望があるのかもしれません。はたしてそれがどうなのか？そんな問題提起がこの

番組から投げかけられたように思います。

この番組については、より多くの方々に見てほしかった。周辺の人たちに理解をさせることが目的としては非常に大きいと思います。ナレーターに渡辺えりさんを選んだことが、年代的にも番組のイメージやストリーからいってぴったりでした。この方を選んだことに私は素晴しさを感じました。

○中村委員長

三浦副委員長、お願いします。

○三浦副委員長

吉田委員同様、私もナレーションが本当に良かったという印象を持っております。他局ですが、ナレーションがいいと思っているのはＮＨＫの「普段着の温泉」とか、「世界ふれあい町歩き」とか、別の局で「人生の楽園」という番組があります。みんなナレーションがいいなと思っています。今回の番組は、特に冗長でもないし、散漫でもないし、押しつけがましくないし、非常に耳障りのいい印象を受けました。

こういう番組を作られためんこいテレビに、改めて敬服したいと思います。なかなかこういった番組を作るということは大変だったと思います。

あえて何か注文というか、言いたい事があるとすれば、行政、産業界、政治、法制面での不備、そうしたところをもう少し取り上げてもいいのかなと思う反面、それを言うとやや社会派過ぎて見づらくなるのかなという思いもありました。これぐらい淡々としていた方がいいのかなという感じもする反面、国として、自治体として、あるいは経済界として何かやるべきことがあるのではないかという視点が欲しいと思いました。ただ、そのようなことを言うと、また難しい面も出てきてしまうのかな？とも思いました。以上です。

○中村委員長

審議会に入り審議した番組のなかで、私は今回一番感動したと思います。２度ほどハンカチを取り出しました。まず、高橋先生は大変素晴しい先生だと思いました。高橋先生のいろいろな発言とナレーションをする渡辺えりさんの関係が非常にぴったりしていて、その流れが番組の所々で感動に引っ張っていってくれたのではと、非常に感じました。

発達障害というのはあまり知られていない部分があります。この番組でもありますように

伸也君の場合と夏美さんの場合があります。非常に幅広いものがあります。普通、発達障害の場合、先天的なものでありますが、後天的にキレやすい人間もいるわけです。周囲に危害を与えるような子もいて、そことの区別がなかなかつきにくい場合もあると思います。その辺がどうなのかということが番組を見ていて気になりました。全体を通じて、発達障害どういうものなのかを、きちんと教えてくれた素晴しいドキュメンタリーだったと思います。ぜひ、いろいろな方に見せていただきたい。

私の大学でもいろんな障害をもった方々をできるだけ受け入れるようにしています。身体障害者の場合は比較的ケアしやすいのですが、発達障害は目に見えないものですから、症状が出てこないという問題もあります。どうやって支援するかということがひとつの問題になっています。

こういう番組を教材として見せていただくと、こういう症状の出方があるんだ、こういう先生の面倒の見方があるのだ、ということが非常によく分かるという気がしました。特に高橋先生は「伸也君は亀だ」という話しをしていました。私も教育は忍耐だと思っています。非常に出来のいい学生もいますが、いろんなレベルの子がいます。大体はじっと待っていないと成長の見えない子が多い。発達障害の場合には特に多いのかもしれませんが、そこをじっと耐えて成長していく子供たちの姿を見るのが、ある意味では教師冥利ともいえるかもしれません。１年半の密着取材だったと聞きましたが、見ていると彼も成長しています。キレやすさが今後どれだけ減ってくるのか分かりませんが、伸也君の場合非常に穏やかな性格になって、後輩との付き合いもできるようになりました。特に夏美さんは軽い知的障害があるとはいっても、全然そういうことを感じさせない。漢字が読めない、算数ができない人はたくさんいます。いつもニコニコしているところ、裁縫にかけては他には負けないような自信をもっていることなどは、普通の子供たちでもなかなかそうはいきません。そのような感動を与えてくれた子供達だったので、何もことさら問題にすることはないという気がしました。

ただ発達障害が養育手帳で知的障害として認定されてしまうところに、若干問題点を感じました。一旦認定されるとずっと付いて回るんじゃないかと思います。就職の時には「こういう人だよ」と教えなくてはいけないのかもしれないが、そういう目で見られてしまうということに対して、はたしてどうなのかという疑問があります。そこは行政的にこういう風に成長していくんだから、どこかで消すような仕組みはできないものかと感じました。

全体的に大変優れたドキュメンタリーで、私としては久々にお涙をいただいたような番組でありました。

２・３ヵ所、わからないこともありました。　伸也君が実家に帰りたがらないというところがありましたが、なぜなのかよく分かりませんでした。ちょっと中１の時に事件があったというけれども、帰りたがらないというのはよほどの事件がなければならないので、そこを何か一言、二言、言っていただきたかった。吉浜ラーメンの後、非常に楽しく実習をやっていたのに、次の職場できつい、つらいということになってきた。そこの理由がよくわかりませんでした。何かそこに吉浜ラーメンとは違う環境があって、たぶんそこが彼にそういう思いをさせた。それが発達障害にひとつの症状を表す何かがあったのでは、という気がしました。そこをもう少し掘り下げていただければありがたかった。もう一つは後輩が自分を避けていると感じた。これは感じたのか、そういう原因が何かあったのか、そこも良く分かりませんでした。なぜ、あそこであんなにキレたのかという理由が分かりません。そういうところを、さらに踏み込んでひとつひとつ説明していただけると良かったと思います。

発達障害について、いろいろと見えてきている問題点を提起している素晴しい番組になっていて、これは大賞をいただけるような番組だったのではないかと思って見させていただきました。今後とも、ぜひこういう番組を作っていただければありがたいなと思いました。

続いて欠席委員の方からのレポートを事務局からお願いします。

〇事務局

久慈委員からのレポートです。

FNS ドキュメンタリー「凸凹な僕たちと学校の母ちゃん」を拝見しました。最初は「凸凹な僕たち」という表現をしている意味がわからなかったのですが、番組内で先生の言葉から引用しているんだ、と理解しました。

また、発達障害が健常者と障害者の狭間にある、という事実は知らず、この問題は社会的にも非常に大きな問題であり、番組内ではあまり強くその辺は追及していませんでしたが、しっかりと向き合っていかなければいけない問題だと、子どもを持つ父親として感じました。

そして、ナレーションですが、いつもとちょっと違い「私」という言葉で話していました。これは主人公の先生の気持ちや思いを表現しながらナレーションしていると思いましたが、いつものナレーションと感じが違い、より主人公である先生の気持が伝わったような気がします。意図してこのような方法をとったのならば、ドキュメンタリー大賞という作品では効

果的だったような気がします。
　いずれにせよ、様々考えさせられる作品でした。お疲れ様でした。

斉藤純委員のレポートです。

　特別擁護学校を取材したドキュメンタリー「葦牙＊」を思いだしながら、みました。
大絶賛します。
　この番組に出てくれた子どもたち、親たちの勇気に敬意を評します。そして、番組も感動的でしたが、この番組をつくったのが坂口さんだと知って、ますます感動しました。
　隠しカメラを使わず、取材対象と人間的な距離をもって制作した坂口さんの真摯な思いが、ひしひしと伝わってくる番組でした。できれば、そこに行って坂口さんを力強く抱きしめて、この賞賛の思いをお伝えしたいところですが、残念ながら（坂口さんにとっては幸いなことに）今日はうかがうことができません。
　この番組は、県内全部の高校生と高校生の子を持つ親にみてもらいたい。数学や物理よりも大事なことがあることを教えてくれるはずです。真也の「もう高校生じゃないんで」という言葉がとてもよかった。
注）＊あしかび

レポートは以上です。

○中村委員長
　ありがとうございました。
　ひとつ言い忘れたのですが、最初に一戸局長が「坂口ディレクターは挑戦した」とおっしゃっていましたが、この番組はプライバシーの問題に果敢にも挑戦しているのですね。通常ですとモザイクをかけるところをそのまま映して、実名を出して紹介しています。場合によっては、番組を見た人がこんなのやっていいのと言い出すかもしれないと、ちょっと心配になりました。デリケートな問題なので、出演者のご了解を得て放送をしているというようなことを、番組で流したほうが良いようにも思いました。

　最後に何か質問やご意見はありませんか？

菅原委員、どうぞ。

○菅原委員

モザイクを使わなかったのは大成功でした。正々堂々としていて良かったと思います。卒業証書の授与で、校長先生が卒業生一人ひとりに声をかけていたところも良かったですね。

取材対象になった二人の顔出しは、私は問題ないと思います。真也君はアルバイトが決まったそうですが、テレビで顔出しをしても、本人には乗り越えていく力があると思います。

○中村委員長

ありがとうございました。それではこれで、本日の議事を終了とさせていただきます。

○事　務　局

中村委員長、ありがとうございました。

今回の審議会の模様は7月２４日（土）朝４時３０分から「めんこいテレビ批評」として放送いたします。

８月は恒例によりお休みとなり、次の開催は９月１４日（火）となりますので、よろしくお願い致します。

それではこれで番組審議会を閉会とさせていただきます。

７．審議機関の答申又は改善意見に対してとった措置

特になし

８．審議機関の答申意見概要を公表した場合におけるその公表内容、方法及び年月日

＊ 平成２２年７月１４日（水）　産経新聞　東北版

＊ 平成２２年７月２４日（土）午前４時４０分から４時４５分まで「めんこいテレビ批評」内で放送

＊ 据え置きの書類を作成し、本社受付に置き一般の人々が自由に閲覧できるようにした

９．その他の参考事項

特になし